

9月8日（火）

ヴェネツィア市役所表敬訪問・施策説明

ホテルから水上タクシーにて市役所まで移動した。

市役所の近くにはカナルグランデ（大運河）に架かる4つの橋の一つであるリアルト橋があり、朝から地元の方や観光客で賑わっていた。

市役所正面玄関で表敬訪問するパオラ・マール副市長とお会いする事ができ、パオラ・マール副市長自らの案内により移動した。

パオラ・マール副市長の挨拶の後、ヴェネツィア市における観光施策について説明を聴取し、最後に村上副市長、東議長から挨拶を行った。



ヴェネツィア市庁舎

【パオラ・マール副市長 挨拶要旨】

本日、日本の重要な都市の一つである大阪の皆様をお迎えできたことは非常に光栄である。

また、ルイージ・ブルニアーロ市長からも皆様によろしくお伝えいただきたいとのメッセージとともに、くれぐれも丁重にお迎えするよう申し付けられている。私自身も皆様に心より歓迎申し上げる。

本日、大阪市代表团及び大阪市会代表団の皆様をお迎えできたことはヴェネツィア市にとっても非常に名誉なことであり、今後、親睦を深める重要な機会になると考えている。

大阪は商業・経済の面でも非常に重要な都市であり、日本国内はもとより、世界においても非常に重要な都市であり、同時に、長い歴史と伝統を持った都市であると伺っている。

本日の機会がヴェネツィア・大阪の両市にとって様々な経験や情報を共有できる機会になればと願っている。

パオラ・マール副市長の挨拶の後、引き続き、パオラ・マール副市長及び観光担当職員から観光施策について説明を聴取した。

【施策説明概要】

・パオラ・マール副市長

ヴェネツィア市を年間訪れる観光客数は約2,500万人である。この内、500～600万人が市内に平均して2～3泊宿泊している。それ以外のうち、約1,500万人は日帰りである。

このように日帰り観光客が多いという特殊な状況であり、日中にどれだけの観光客が滞在しているのか確認することは難しい状況にある。

ヴェネツィア市は歴史的旧市街と島ではない本土側の2つの全く異なる地理的環境を併せ持っている。このような特徴はヴェネツィアならではの特徴であり、メリットでもありデメリットでもある。

まず、ヴェネツィア市にアクセスする方法として、車、バス、電車などにより橋を渡って入ってくる方法やボート、飛行機で入ってくるなど、様々な方法があるため、ヴェネツィア市に入ってくる正確な人数をチェックすることは非常に困難である。

ヴェネツィア市はベネト州の中にあり、ベネト州の観光客数は6,200万人となっており、その内2,500万人がヴェネツィア市を訪れている。これだけの数の観光客がヴェネツィア市を訪れるということは、住民にも多大な影響がある。

ヴェネツィア市の人口推移であるが、歴史的旧市街、本土側、各島の地域別でも歴史的旧市街における人口減少が著しい。1951年からの65年間で150,000人から66,000人に減少している。人口減少の要因が大量の観光客の流入だけで引き起こされたものではないが、影響がないとは言えない状況にある。

また、どのような国籍の観光客が来ているのかという点も重要である。特にこの20年間で大きな変化があった。伝統的にヴェネツィア市に多く訪れている観光客はアメリカと欧州、そして日本となっている。これに加えて、最近では特に新興国からの観光客が増えている。例えば、中国、ブラジル、韓国などであり、韓国だけでも21%増となっている。この後、担当から具体的な問題点や解決策、また、ビジネスチャンスがどこにあるのかといった観点から説明する。

・観光担当職員

ヴェネツィア市の抱えている大きな課題は人口が66,000人というヴェネツィア市に年間2,500万人の観光客が訪れることである。これをどのようにマネジメントしていくのかということになる。つまり、住民生活を維持した上で、いかによい形で多くの観光客を迎えるのかが課題である。観光による収入はヴェネツィア市にとっては非常に大きな収入源であり、住民生活と観光客への対応を両立させなければならない課題がある。

ヴェネツィア市は1800年代から様々な映画や本、小説などの舞台となっており、ヨーロッパを中心とした旅行の目的地として、また、ビエンナーレや現在開催中の映画祭などのイベントなどを見に訪れるということで、世界中の方々を惹きつけてきたわけである。

しかしながら、ヴェネツィア市を訪れる人の中には市民生活がどういったものなのか、実際にここで生活している住民のことを全く理解しないまま訪れている人も多く、住民からすると非常に奇妙な質問を観光客から受けることがある。例えば、歴史的旧市街にテントを張ってもよいか、サンマルコ広場に車を止めてよいか、自転車でもよいかなどの質問をよく受けるが、実際にはそのような事に関しては一定のルールがある。ヴェネツィア市においても普通の他都市の一般道と同じルールが適用されており、ヴェネツィア市内は車の通行はできないが人の通行に

関しては右側通行である、橋の途中で止まってはいけない、自転車の通行に適していない街の造りであるため警察の指示により自転車でヴェネツィア市に進入してはならないとなっている。歴史的旧市街に関してはそのようなルールであるが、リド島などの他島では自転車道を住民生活と両立した観光施策の一環として整備している所もある。

ヴェネツィア市としては観光客を基本的に喜んでお迎えするという姿勢ではあるが、観光客は住民に対しては最低限の敬意を持って接するべきである。それにより、観光客も楽しむことができ、住民も観光客から収入を得ることができるため、お互いが良好な関係となる。そのような関係が構築できればと考えている。

ヴェネツィア市の強みは世界中に名前を知られていることであり、多くの有名な国際イベントを開催しているということ、また、宿泊に関して複数の選択肢を観光客に提供しているということである。宿泊先というのは歴史的旧市街だけでなく、橋を渡る手前の本土側にも多くの宿泊施設がある。

ヴェネツィア市にはサンマルコ広場やリアルト橋だけではなく、歴史的旧市街に加えて各島や本土側にも様々な見所があり、そういった場所にも観光客が訪れてもらえれば価値が高まると考える。

一方で、ヴェネツィア市が今抱えている問題点や弱点も当然ある。なんといっても観光客が非常に多いことである。それに伴い、観光客に提供するサービスの質が低下している、あるいは、観光客も数時間のみの滞在で帰ってしまい、あまりお金を使わないということである。

また、サンマルコ広場やリアルト橋などの一部のエリアが非常に込み合ってしまう。それらの問題を何らかの解決策をもって改善していく必要があると考えている。

それらの問題点を踏まえ、ヴェネツィア市としてどのように改善していくのかということであるが、一般的な観光に加えて文化的な活動を推進・提供していくことや有名な観光地を見てすぐに帰るということではなく、あまりまだ知られていない島や歴史的旧市街以外の場所でより時間をかけてスローな観光を楽しんでもらうということである。

観光施策を住民生活と両立させ、将来に渡って持続していくことは、これだけの観光客が大量に流入してくる状況を見ると非常に難しい複雑な問題であり、非常に大きなチャレンジである。そして、観光施策を持続していくために2011年から観光税を導入した。これはヴェネツィア市に滞在する観光客に対して最初の5泊までは一定の金額を課すというものである。つまり5泊以上ヴェネツィアに滞在することを奨励する意味になっている。この税金はホテル以外のキャンプ場、あるいはペンションのような施設を利用する場合にも適用している。

さらにヴェニスパスということで、ヴェネツィアユニカという名称で観光客向けのパスを用意している。オンラインで購入が可能であり、観光客のニーズに応じて市内の交通機関、博物館、美術館の入場、あるいは駐車場、教会、トイレの利用などいくつかのパッケージとして好きなように観光客が組み合わせて購入できるようにしている。

そして、現在進めているプロジェクトが「デ・トゥーリズム」である。大量の観光

客を流入されるがままに受け入れているといつか街が破綻してしまうこととなり、ヴェネツィア市自体の存在が危うくなってしまいう可能性がある。それはあってはならないことであり、より持続可能で今までの観光とは違った観光をしてもらう、ヴェネツィア市を違った形で見てもらうことを目指して、観光客に生活者としてヴェネツィア市を体験してもらえようといういろいろなチャンネルで宣伝・発信をしている。例えば、週1回のニュースレターの発行、オンラインマガジンの発行、SNS経由での発信を行っている。

また、通常の観光ルート以外の見所マップをヴェネツィア市として作成し、ヴェネツィア市の内外で開催されているファーマーズマーケットやあまり知られていない公園や伝統工芸品のお店の場所などを紹介している。このマップの中にはさらに小さいマップが入っており、ヴェネツィア市内の各地にある噴水の場所が掲載されている。これは現在、ヴェネツィア市として進めているプロジェクトの一環であり、マップと一緒に販売される空のペットボトルにマップで示されている噴水の水を無料で汲んで飲むことができる。毎日水質をチェックしており、非常においしい水である。そのような形で観光客が毎日ペットボトルを購入するのではなく、水を補充する形にすれば大量に出ているプラスチックごみの減量にもつながると考えている。

このような施策を実施していくことにより、課題の解決に繋がり、持続可能な観光が実現していくものと考えている。

【村上副市長 挨拶要旨】

今回のイタリア出張の主な目的は、本市が出展するミラノ国際博覧会への出席であるが、期間は短いがヴェネツィア市には是非立ち寄りたかった。

昨夜到着し、街の景観の美しさに心を奪われている。運河沿いに歴史的建造物、観光スポットが集積し、また、隔年開催される世界最大の現代美術の祭典「ヴェネツィア・ビエンナーレ」をはじめ、映画祭、仮装カーニバル、オペラ等の魅力を通じて、世界中から年間約2,500万人の観光客を呼び込むヴェネツィア市の観光施策についてお聞きしたところである。

今お聞きした取り組みや直面している課題等から多くを学びたいと思っている。

本日午後にはフェニーチェ歌劇場訪問も予定している。是非、世界中から観光客を魅きつける民間集客施設や国際イベント等との連携についても、お話をお聞かせ頂きたいと思っている。この機会に心より感謝申し上げますとともに、本年6月のルイージ・ブルニアーロ新市長ご就任を機に、ヴェネツィア市の益々のご発展とパオラ・マール副市長のご健勝をお祈りする。

【東議長 挨拶要旨】

昨日の夜に到着し、レストランで食事をしたが、今回はヴェネツィア市には1日の滞在予定であり、残念ながら今日でお別れすることとなる。これからは先ほどの説明にあったように、何日間も滞在するスローな観光に協力していきたい。

大阪市も、ヴェネツィア市と同様に、中国、韓国、タイなどからの観光客が非常に増加してきている。しかし、宿泊施設がヴェネツィア市ほど満足な状況になく、観光

客のホテルを確保することが課題となっている。

大阪市においても、まちづくりや集客観光施策は、重要な市政の課題となっており、ヴェネツィア市の取り組み事例をぜひ参考にさせていただきたい。

また、欧米系の観光客が少ないことも課題の一つであり、今後は欧米系の観光客を取り込むような施策を推進していきたい。

ヴェネツィア市の持続可能な観光施策を参考に、今後も水都大阪をしっかりと盛り上げていきたいと思うので、パオラ・マール副市長も機会があれば是非、大阪市にお越しください。

この後、記念品の交換、ヴェネツィア市の象徴である羽のあるライオン像の前で記念撮影を行い、表敬は終了した。



記念撮影

ビエンナーレ視察

パオラ・マール副市長にも同行いただき、水上タクシーで移動し、ビエンナーレ会場を視察した。

【説明概要】

ヴェネツィア・ビエンナーレは芸術の祭典であり、1895年から始まっており、100年以上の歴史がある。

今年は5月から11月の期間で開催している。

ビエンナーレ会場は昔の造船所跡地（アルセナーレ）とカステッロ公園（通称ジャルディーニ）がメイン会場であるが、街中の宮殿でも作品を紹介しており、普段入場できない建物であっても、ビエンナーレ開催中は入場することができ、何百年前の宮殿とモダンアートの組み合わせを見ることができるのも、ビエンナーレの面白さと言

える。

ビエンナーレは利益目的ではなく、国の代表アーティストを宣伝するためのものである。

また、ビエンナーレは美術だけでなく、建築もあり、隔年ごとに開催されており、参加国数に大きな変化はない。特に美術は現代美術の動向を確認できる場であることや国が出展単位となっている国際展としても有名である。

現在は88カ国が参加しており、最初に展示場を設置したのはベルギー国であり1807年のことである。日本館は1956年に設置され、参加国の中でも歴史は古い方である。

概要説明を受けた後、日本館及び旧イタリア館の視察を行った。

今年の日本館は塩田千春さんの「掌の鍵」というテーマで出展されており、館内は赤い糸が張り巡らされ、様々な種類の鍵が吊るされており、壮観であった。

また、会場内外は多くの人であふれ、入場券を購入するために長蛇の列ができており、文化・芸術に対する意識の高さを見ることができた。



日本館内



旧イタリア館

フェニーチェ歌劇場表敬訪問・視察

ビエンナーレ会場から再び水上タクシーで移動し、パオラ・マール副市長の案内によりサンマルコ広場などを視察した。昼食にも同席いただき、ヴェネツィア市の様々な取り組みについて意見交換を行った。その後、ヴェネツィアにおける最後の視察先であるフェニーチェ歌劇場まで案内いただいた。

フェニーチェ歌劇場に到着後、今回の視察にあたりご尽力いただいたフェニーチェ歌劇場で長年にわたりご活躍されている小澤美鈴氏にお出迎えをいただいた。

フェルトナート・オルトンビーナ芸術監督の挨拶の後、フェニーチェ歌劇場を視察した。

【フェルトナート・オルトンビーナ芸術監督 挨拶要旨】

世界一の劇場であるフェニーチェ歌劇場へようこそ。

後ほどオペラのロッシーニの「結婚手形」のリハーサル風景をご覧いただくが、ロッシーニの18歳の時のデビュー作であり、フェニーチェ歌劇場で最初にオペラを上演した歴史がある。ロッシーニの名前は有名であるが、ロッシーニには才能があるということから様々な機会を与えたのがフェニーチェ歌劇場である。その他、1800年代にはヴェルディやベネデッティといった偉大な作曲家の作品を上演している。

日本では2001年、2005年、2013年の3回の公演を行っており、2013年の公演は大阪から始まるツアーであった。フェスティバルホールは非常に新しく素晴らしい劇場であり、大阪のお客様のオペラへの情熱を感じることができ、非常に大きな経験となった。近いうちに再び日本公演を行いたいと思っており、是非、大阪にも寄りたいと考えている。

フェニーチェ歌劇場の素晴らしさをご堪能いただきたい。

フェルトナート・オルトンビーナ芸術監督の挨拶の後、概要説明を受け、館内を視察した。

【説明概要】

フェニーチェ歌劇場は18世紀末に建築された劇場であるが、当時、ヴェネツィアには7つの劇場があった。1755年に貴族であるグルマーニ家により建設され、経営は貴族の保有する会社が行っていた。1787年に経営権を譲渡した際、サン・ベネゼットにあった劇場を新しく立派な劇場に建て替えるということから、現在の場所に建築されたものである。その際に付けられた劇場名がダ・フェニーチェ（不死鳥）であり、現在の名称となっており、不死鳥のごとく蘇るという意味がある。

当時、建築プロジェクトに携わっていたのはジャンアントニオ・セルヴァという建築家であり、1791年から建築を開始し18カ月で完成させた。

1836年に劇場を暖房するストーブからの引火により入口正面及び内部の一部を除いて火災でほぼ全焼してしまい、不死鳥のごとく蘇らなければならないこととなった。復旧作業に入り10カ月で完成させたものの、突貫工事であったため、20年後には老朽化が激しくなり、修復工事を行うこととなる。再建時には、当時はそれほど流行っていなかったバロック調を導入し豊かな内装に心掛けた。

1935年には経営権がヴェネツィア市に譲渡され、公的な位置付けで運営されることとなる。

1996年には再度火災が発生している。原因は修復により閉館中であったが、工事の遅れで罰金を支払わなければいけない電気工事士がボヤ騒ぎを起そうと点けた火が大火災になってしまったものである。床の一部と内部の一部は残ったものの、正面入り口や天井などは全焼してしまった。

この大火災を機に再建築の際には、今度は綺麗できちんとしたものを建築するということから7年の歳月をかけ2003年に完成した。元の場所に元の形で再現することを目的に当時の写真や記録をもとに建築されている。最も大切にしたことは音響であり、

音響が違くと劇場そのものが変わってしまうと言われるくらい重要なことであり、最も注意を払った点である。



フェニーチェ歌劇場

フェニーチェ歌劇場の視察を終え、ヴェネツィアでの行程を終了し、電車で2時間30分かけて、ミラノへ移動した。